

# 読書感想文入賞作品

『路傍の石』 山本 有三 著

## 「夢」を捉える

機械工学科2年 末永 共助

「精神一到何事かならざらん」

これは、「路傍の石」の主人公、吾一の師である次野先生の言葉だ。何事においても、強く願い、努力するなら何でもやれる、という意味である。強く心に刻み付けておきたい言葉ではないだろうか。

吾一の家庭は、彼の父親が、土地に関する訴訟で莫大な借金をつくったため、とても貧しいものであった。さらに、父親はその訴訟のせいでほとんど家にいないため、吾一の母親が内職をして、何とか生計を立てていた。そんな環境の中で育った吾一であったが、彼には一つ、夢があった。「中学へ行きたい」という夢だ。このときの中学校は、今の高等学校にあたり、入学試験も存在した。そして、当然といえば当然であるが、入学費を始めとした学費が相応の額、必要となった。吾一は、大変な環境の中で育ったものの、成績はとても優秀であり、入学試験も難なく合格できるレベルであった。しかし、学費が払えるほど裕福でないことを知っている吾一は、自分のわずかな貯金を学費にあてて、中学へ行かせてはくれないか、と母親に頼む。だが、その願いは打ち砕かれた。なんと、例の訴訟で借金を負った彼の父親が、その穴埋めに、息子のわずかな貯金さえも使い込んでいたのだ。中学への道を閉ざされた吾一は、かつての級友の家である呉服屋に奉公に行く。その中で、番頭や店主からの厳しいしつけに耐えつつ、手の空いた時間で勉強に励んだ。その後、吾一は、自分の父がつくった借金を返すために、この呉服屋で奉公させられているということを知る。

「人間、借金のかたなんかにされてたまるもんか」

吾一はそう思った。そして、母親が亡くなったのを機に、彼は呉服屋を出、東京へと向かった。その後、紆余曲折を経て、彼は印刷所で働くことになったのだが、働いている間も、活字を見て学ぶなど、学ぶ

ことに対する熱意は冷めることがなかった。

僕は、常に自分の夢や願いを思い続けることは、どれほど大変なことだろうか、とこの本を読んでから考えた。人生、自分がしたいことが満足にできないことも、数多くあるだろう。この本のような時代であれば、尚更である。しかし、そんな中でも吾一は自分の夢を忘れたことがなかった。それは、本当にすごいことだと僕は思う。

吾一は、ひょんなことから、かつての師であった次野先生と再会することになる。次野は、自分が教えている商業学校に、吾一を誘い、ついに吾一は自らの「中学に行きたい」という夢を、少し形が変わってはいるものの、叶えることができたのであった。

物語はここで終わっているが、その後、吾一は素晴らしい人生を送れただろう、と僕は信じている。たとえそうでなくても、彼の人柄と、学ぶことに対する熱意は必ず道を切り開くと思う。国民教育の父と呼ばれた森信三先生の言葉に、次のようなものがある。

「人間の生き方にはどこかすさまじいものがなければいけません。一点に凝縮して、それを達成しなければ、死んでも死なないというほどの執念です。」

まさに吾一を体現した言葉ではないだろうか。どんなときにも、自分の夢を忘れず、強く思い続ける「精神一到」の精神があれば、芯の通った大きな人間になれると思う。そうすれば、たとえ「路傍」にありながらも、道行く人を支えられる、大きな岩になれるだろう。そのような人に少しでも近づけるよう、日々、自分の夢を確認し、努力を続けてゆきたい。

『君の名は。』 新海 誠 著

## 人を強くする出逢い

—「君の名は。」を読んで—

機械工学科2年 樽井 颯

先日、公開されたばかりの新海誠作品「君の名は。」を見に行き、内容が面白かったので小説版を読んでもらうことにした。田舎町に暮らす三葉、東京で暮らす瀧がお互い夢の中で入れ替わり様々な日常を繰り広げていく物語で、今回はその中の見どころとも言える入れ替わりや恋から考える「人を強くする出逢い」を書こうと思う。

前半のほうで、不定期でお互いの体が入れ替わりながらもなんとか日々を過ごしているうちに、バイト先の奥寺先輩に想いを寄せる瀧を察したのか、瀧（みつは）は彼女に猛アタックを始める。瀧がもがき苦しみ続けた先輩との距離感は確実に縮まっていたのだ。この手のファンタジー系の物語を見ると、自分はよく思ってしまうことがある。「イケメンなあいつと、勉強ができるあいつの能力と、入れ替わってくれたらなあ」と苦笑せざるを得ないことではあるが……。三葉のおかげでデートまで発展し、当日は運良く入れ替わらず瀧がいくことになった。結果から言うと、ダメダメだった。やはり瀧（たき）では瀧（みつは）のようにいかず、会話が詰まってしまう。ここで、自分は考えてしまった。自分には才能がない、優秀な人に入れ替わりたいと悩んでも、「身」は同じものの思考や行動が全く違う、つまりそれは自分自「心」でなくなるのではないだろうか。デート中、奥寺先輩が「今日は別人みたいね」と言いその後別れたのは、もしかすると瀧の変化に気づいていたのかもしれない。入れ替わっても仕方がなくそれは自分ではない、だからこそ他人の力でなく自分の力で手を伸ばし続けるのが大事で、自分や誰かの代わりなど存在しない、自分自「心」を磨き続けるのが大切だと痛感した。

後半、二人はそれっきり入れ替わることなく途絶えてしまう。瀧は三葉に会いたいという気持ちから

探す旅に出かけ、お互いこの時間軸の人間ではないということが判明して……。ここから先は、ぜひ本編を見て欲しいとお勧めする。時空を超えた出会いの中で、二人は記憶を忘れそうになりながらもお互いを探し続け、再び出会うことができたのだが、それはなぜだろうか？クライマックスで瀧は「人の記憶ってのはどうしてこうも忘れっぽいんだ」と自問し心に残ったあたたかさだけを頼りに走っている場面がある。実際、自分も大切な人のために全力で走り続けたことがあった。今ではもう遠い昔のように思え、自分でもなぜあんなに必死になっていたのかとなるくらいに忘れてしまったが、「楽しかったな、良い経験をしたな」とあたたかさだけは今でも残りあの頃を取り戻したいと思うことがある。瀧が頼りにしたあたたかさが「恋」でありそれが三葉も同じだったから二人は出会えたように思う。最後の方で瀧が「記憶の中でもあたたかめてくれるような大切なものを探している」というように、忘れることのないあたたかさこそが恋だと——「人の記憶は忘れっぽい」というのは逆説的だと「記憶の中でも忘れない程恋は大切」だといえるだろう。あたたかさを頼りに、前に進むことを恐れる必要はないと肝に命じたい。

出逢い、とは人間関係におきることだとよく聞かすが、恋愛だけに限った話ではない。自分の住む家、学校の帰り道、よく遊んだおもちゃ……。様々な人、物や町に恋をして出逢いが生まれ経験を積んでいく。人が様々な出逢いをアルバムで残すのは、それが大切だからといった表われであろう。自分を磨き続けて、沢山の経験を積むことができる「出逢い」は人を強くしてくれると自分は考える。

『レインツリーの国』 有川 浩 著

## 人と人の関わりの難しさ

電気工学科2年 近藤 亘

この小説では聴覚に障害を持っているひとみが出てくることから聴覚障害について書かれている部分があります。聴覚障害は二重の障害であり、まず音から隔絶され、それにより健聴者とのコミュニケーションが阻害される。そして問題は、コミュニケーションから隔絶された状態に置かれることを世間では認知されにくいこと。聴覚障害は中途失聴と難聴と聾・聾啞に区別され、音の伝わりにくい難聴の伝音性難聴と音を聞き分ける能力自体に問題がある感音性難聴の種類があること。他にも聴覚障害について書かれている部分が多くあります。私はこの作品で障害についてあまり知らないことを分かりました。作者は聴覚障害について理解しており、障害者の心境を私が思っていたことよりもっと深く考え、健聴者である伸行の気遣いや言葉が一步届かず、噛み合わない、行き違う関係を書いていることがとてもうれしく自分の考えの浅さを突き付けられとても尊敬しました。

また作者は辛さを抱えているのは障害者だけではなく健聴者もだと書いています。伸行の辛い過去を突き付けられたひとみは、

聴覚障害者にしか聴覚障害者の悩みや辛さは分からない。だから分かり合うことなどできないと思っていた。

だが、他人に理解できない辛さを抱えていることは健聴者も変わらないのだ。その辛さの種類が違うだけで。

としている。私は障害を持っているから普通の人より辛いということではないとしている作者の考えに共感を持った。誰にでも辛いことはある。しかし自分自身の辛さは他人にありふれたことと見られても自分には世界で一番辛いことになる。それは人間であるから当然の考えであるが実際はそうではないのだと学びました。

私がこの小説に興味を持った言葉が二つあります。一つは「『聞く』と『聴く』の違いって分からないでしょう？」という言葉です。「『聞く』っていうのは、耳から入ってきた音や言葉を漫然と聞いている状態」で「『聴く』っていうのは、全身全霊傾けて、しっかりと相手の話を聴くこと」と二つの言葉の違いを聴覚障害者であり言葉を大切にするとひとみが言うことでとても重みがあり、私が普段使っている言葉の一つ一つについて考えさせられました。そして一つは「明日自分が突然難聴になったとして、あんなだったら自動的に手話ができるようになっていたのかと言いたい。」という言葉です。難聴だから手話ができるといった勝手なイメージによる、それだからあれができるといった考えは自分の知識のなさが相手を不快に思わせることがあるのだと考えました。

私はこの小説を読み、恋愛小説だがその中にある障害者について、人と人との関わり方について感じるものが多くありました。私が実際に障害を持った人と関わりを持った時、自分はその人を理解することができるのか、受け入れるだけの力があるのかと考えました。おそらく今の私では受け入れることはできずあまり関わりを持たないようにすると思います。よって将来的に受け入れることができるだけの力を手に入れるために、知識と経験を積み重ねます。

『手紙』 東野 圭吾 著

## 罪を背負う人 —「手紙」を読んで—

電子制御工学科2年 風岡 颯

弟の直貴の大学進学のためのお金欲しさに兄の剛志は空き巣に入り、殺人を犯してしまう。それから、直貴の元には毎月獄中の兄から手紙が届く。直貴は大学進学を諦めて就職するが、やがて通信教育学部に入学し、転籍して普通の大学生となる。バンドでプロデビューをしそうになったり、上流の令嬢と結婚しそうになるが、毎回「強盗殺人犯の弟」とい



う素性がばれて挫折してしまう。兄のことを隠してなんとか有名企業に就職したものの、そこでも事実が露見して差別を受ける。理解ある妻を得たが、次は娘が差別を受けることとなる。そして、直貴は遂に剛志へ絶縁状を書いた。これが手紙のあらすじである。

僕がこの本で一番感じたのは、罪は牢獄に入るだけで償えるものでなく、その家族を中心とした周りの人にも強制的に多大な迷惑をかけ、罪を押し付けるような形になるということです。直貴を筆頭に何も罪を犯していない人達が「強盗殺人の弟」やその身内として差別を受けている姿を見て、この人達は加害者扱いをされているけどこの人達も被害者の一部ではないのかと思いました。直貴の娘が差別を受けている場面では心が締め付けられました。また、このように思った反面、犯罪者の身内を自分の近くに置きたくないという世間の声も正直理解できます。犯罪者の身内がこのような体験に出くわすのは残念ながら仕方のないことではないかというのが、僕がこの本を読んで考えたことの結論です。剛志が罪を犯そうと決めた瞬間からこのような未来は決定していたと思います。それほど罪は自分で思っている以上に重たいものであるということを改めて学びました。

また、差別されるという未来を見据えていながらも直貴と結婚した妻にとっても尊敬の気持ちを抱きました。困難にぶつかり、崩れていく直貴を冷静に支えている姿に感動しました。もし、自分が女性でその立場であった時を考えても、到底できる気がしませんでした。耐え抜いた直貴の裏でしっかりと支える妻はカッコよかったです。

この本の最後は、直貴が兄のいる刑務所でもう一人の理解者と音楽ライブの慰問を行うのだが、舞台上で数多くの囚人の中から兄の姿を見つけ出して話は終わっている。僕の憶測だが、直貴の心の中に怒りの文字は無いように感じました。数えきれないほどの困難があったが、その時には兄を恨む気持ちは無く、素直に久しぶりに兄の姿を見れて嬉しく、これ

からの兄と自分の幸せを切実に願っていたのだろうと思いました。このラストのシーンを読んだときには感情移入をしていたので涙が止まらなかったです。

この本は、兄弟や家族についてよく考えさせられました。繋がりは切りたくても切れないものであり、罪を背負うことはとても大変なことであるということとを再認識することのできる本です。

『自然の中に隠された数学』

イアン・スチュアート 著 吉永良正 訳

## 自然と数学の結びつきの奥深さ

物質化学工学科2年 青田 奈恵

自然の中には数学的な規則性がたくさん隠れていて、その規則性は形や数字、運動などとして目に見える形で現れる。毎晩昇る星や雪の結晶、花の花卉の数、動物の走り方など、至る所に数学が隠されている。私はこの本を読んで、数学的な規則性の美しさを再確認すると共に、数学は自然を知る上でとても大切な学問なのだと気付かされた。

私はこれまで、数学に対して、難しい数式を並べてひたすら解くイメージを持っていて、取っ付きにくい学問だと感じていた。しかし、数学は人間にとって非常に身近な学問であり、私達の生活は数学に支えられているし、身の回りの自然は数学と密接に結びついている。私達は自然の振る舞いの規則性を、数学によって見出している。この本は、身近であるにも関わらず普段あまり意識しない自然と数学の結びつきを意識させ、数学は取っ付きにくい学問ではないと強く訴えかけてきた。数学は「人間の精神と文化が発展させた、パターンを認識・分類し、活用するためのかたちに関する思考体系」なのだから、取っ付きにくいものではなく、むしろ気付かぬうちに使っているのだと気付かされた。

この本の中で最も心を惹かれた自然と生活と数学の結びつきの例は、「蛇口から滴り落ちる水滴」だ。

ゆっくりと蛇口をひねると、ポタ、ポタと規則的に水滴が落ちる。少し蛇口を緩めると、ポタ、ポタリ、ポタ、ポタリと二滴毎のリズムの繰り返しになり、もう少し緩めると四滴毎のリズムの繰り返しになり、さらに緩めると八滴毎のリズムの繰り返しになる。そして、ある時点でどの水滴も同じパターンを繰り返さない「カオス」になる。蛇口を調整するだけで水滴を規則的に落としたりカオス的に落としたりできるということに驚いた。又、こうした身近な現象を数学を通して見つめることの奥深さや面白さにも気付かされた。

もう一つ、この本を読んで気付かされたことがある。それは、自然現象の解明などの出来事や便利な生活の裏にある歴史的背景を知ることがとても大切だということだ。どんな知識や科学技術でも、色々な分野のたくさんの人の発見があって生まれている。誰がどんな風に発見したのかを知ること、その知識の本質に触れたり、技術をより身近に感じたりすることができると思う。又、歴史的背景を知ることが、新たな発想や大きな発見につながることもあると思う。

身の回りの現象をじっと見つめると、そこには数学が隠れている。そして、たくさんの人の知恵が詰まっている。それらの素晴らしさ、奥深さに触れれば、数学が自然を理解する上でいかに重要で、なおかつ身近な学問であるかが実感できると思う。

『レインツリーの国』 有川 浩 著  
**「レインツリーの国」と  
 障がい者への向き合い方**  
 機械工学科1年 木村 元哉

『レインツリーの国』は恋愛小説である。

『レインツリーの国』を読み終えて僕が思ったことは、「素敵な恋愛だな」「この二人にはずっと幸せでいてほしいな」という月並みな感想であり、それ以

上でもそれ以下でもなかった。

もう一度読んでみても、つまるところその感想は変わることはないのだが、二度目に読んだとき、僕はこの作品のある脇役の配置の巧みに驚いた。その脇役とは、ヒロイン「ひとみ」の聴覚障害である。

この物語において、「ひとみ」の聴覚障害は乗り越えるべきハードルや対峙すべき敵などではなく、むしろ「誰にでもひとつくらいある欠点」すなわち「個性」として描かれるのである。

「脇役」である聴覚障害は二人の出会いに小さなハプニングを起こし、また二人で過ごす日々美しい色を添える。しかし決してそれは二人の日に影を落とすことはない。

だから、『レインツリーの国』の読者も『障害を乗り越えて〜』とか『障害に決して打ち負けることなく〜』だとかの、ある意味障害を題材にした作品において「月並み」な感想を抱くことはなく、ただこの二人の恋愛を応援したくなるのだろう。

「障害」を「障害」として捉えるのではなく、『個性』として捉える。僕も何度か耳にしたことがあるフレーズだが、言ってしまうえばこの本を読むまでの僕は、真にこの言葉の意味がわかっていなかったのだろうと思う。

この言葉を本当の意味で行うのは難しい。本当に難しい。小学校のころ、足の不自由なクラスメイトがいた。

今にして思えば、彼はクラスメイトたちから明確に区別されていたように思える。べつにいじめられたりしていたわけではないと記憶しているが、彼と彼以外のクラスメイトの間には、細く深い溝がたしかにあった。

うっかり触って怪我でもされたら大変だ、関わりたくない、近寄りたくない。ここまであからさまでもなかったが、おそらくこんなことを思っていた。

今考えてみれば、解決は簡単である。少し勇気のある誰かがさりげなくその溝を越え、他愛もない話をし、必要なところでは手伝ってやる。それだけで彼はクラスに溶け込むことができたのだろう。

ただし、それだけのことができなかつた。障害を障害として、目の前に横たわる溝として捉えていたのだ。現実にはそんなもの、ありはしないのに。

だからこそ、『レインツリーの国』主人公、向坂伸行を尊敬することができる。誰もができたはずのことを行った英雄として。そんな彼とひとみの二人を心から祝福し、二人の幸せを願うことができるのだろう。

ただし、この小説の主題は無論恋愛であり、何度も繰り返すが障害はあくまで脇役であり、ひとみの個性である。

だから僕は人にこの本を紹介するとしても、ほとんど「障害」という言葉を使わないのだろう。この本を何度も読んで感動したのならばなおさらである。この本で「障害」なんてただの「個性」に過ぎないことを学んだのだから。

『最後のプレイボール 甲子園だけが  
高校野球ではない』 岩崎 夏海 著

## 高校野球に携わる人々

物質化学工学科1年 安藤 うた

この本は高校野球に関わる様々な人々の物語を描いたものである。高校野球といっても甲子園でプレーできる話はほとんど無く、挫折や失敗に満ちた球児の姿が多く見られる。中には強豪校に入り副キャプテンになったにもかかわらず、脊髄に膿がたまる病気になってしまい、高校年の夏を奪われた選手もいた。また附属中学から内部進学で野球の強い高校に入学したが、外部から良い選手が来るために入部を許可されず、大好きな野球ができない高校生もいた。野球がしたくてもできない、できたとしても結果が出せないという感情がこの一冊につめ込まれている。

私は高校野球が好きだ。毎年、夏になるとテレビの前でワクワクしながら観戦している。甲子園でプ

レーする球児や応援をする人達はいつも輝いて見えた。しかし、この本に書かれている高校野球は私の知っているものよりずっと重く、深いものだった。

私の弟も小学校2年生から野球を始めた。その時から休日は試合や練習ばかりで親もそれを手伝うようになったので、家族で過ごす時間が減ってしまった。私は寂しいと感じることが何度かあったが、それ以上に弟のいるチームの勝敗によって家族全員で一喜一憂できることが嬉しかった。高校で野球をしている選手は私の弟と同様に小学校低学年くらいから野球を始め、周りを巻き込んで共に進んできた人が多いと思う。同じように頑張っても強いチームや弱いチーム、レギュラーの子、そうでない子が出てくる。このように厳しい世界の中、怪我なく甲子園に出場できることは考えられないほど奇跡的なものと言える。私は高校野球はただキラキラ輝いているものだと思っていたが、球児達や彼らを支える人々にそれぞれの物語があるということを知った。

こんなにもつらく、苦しい野球の練習に耐えてまで野球を続けるのはなぜだろう。野球の魅力はどこにあるのだろうか。この本の中に『息子からの恩返し』というエピソードがある。中学時代は荒れていた野球少年がある高校の野球部に興味を持ち入学したあと、母がガンになってしまい、今まで見に行けていた試合に行けなくなる。それでも息子が3年の夏、思い切って試合を見に行くと息子は母のために、とサヨナラヒットを打った。その後の試合でチームは負けてしまい甲子園には行けなかったが、息子は高校での監督との出会いがきっかけで教師になるために努力をする。この話から野球は人との繋がりを通して多くの人を魅了しているのだと考えた。この息子は一時はお酒も飲むような悪ガキだったのに、母が病気になったことで真面目に生きようと決意した。また、尊敬できる監督の存在のおかげで教師になるという夢ができた。このように野球をすることで人との関わりが増え、絆が結ばれていくのである。それはたとえ親子であっても相手を思いやる気持ちが無ければ恩返しをしようとは思えないはずだ。



これから、私の人生の中で何人もの人と関わると思う。そこにはよく見ないと気付かないような小さな出会いも含まれているかもしれない。そんな時にこの本で学んだ人との繋がり大切さを思い出したい。どんな一瞬でも大事にすることができれば、進む方向が分からなくなった時や困った時に、お互いに支えあえると思う。そして高校野球に携わる人々のように勇気を与えられる存在になりたい。

『かもめのジョナサン』 リチャード・バック 著  
**変わり者のカモメから学んだこと**  
 —「かもめのジョナサン」を読んで—

物質化学工学科1年 村田 優果

すべてのカモメにとって、重要なのは飛ぶことではなく、食べることだった。だが、この風変わりなカモメ、ジョナサン・リヴィングストンにとって重要なのは、食べることよりも飛ぶことそれ自体だったのだ。その他のどんなことよりも、彼は飛ぶことが好きだった。

本文にも書いてあるように、この物語の主人公であるカモメのジョナサン・リヴィングストンは変わり者だと私は思う。群れの仲間が漁船が魚を集めるためにまく食物の切れ端を、生きていくために騒がしく、必死に奪い合っているのにも関わらず、それをよそに、生きていくのとは直接関係のない、飛行の練習をしてしまうくらいだから、相当な変人、いや、変鳥である。でも、ジョナサンは強い意志を持った尊敬すべきカモメだとも私は思う。周りからどんな目で見られようと、どんなことを言われようと、例えばそれが周りから全く理解されなくとも、自分のやりたいことをやるというのは、大変孤独で勇気のいることだからだ。

しかし、常に均一を求められる群れの中で、異端者というものには必ずと言っていいほど、迫害が待ち受けている。ジョナサンもその一人であった。「汝は

カモメ一族の尊厳と伝統を汚した....」とされ、ジョナサンは群れから追放されてしまうのだ。彼はその日からずっと残された生涯を一人で過ごすこととなった。

ただ、ここでもジョナサンはへこたれなかったことに私は驚いた。もし私が、ジョナサンと同じ状況に置かれれば、とてつもない孤独と悲しみに襲われ、最悪、自ら命を絶ってしまうかもしれない。しかし、彼はそんな状況でも次々と新しいことを学び、飛行の技を極めていったのだ。

月日が経ちジョナサンは、光り輝く二羽のカモメに連れられ、かつていた世界とは別の世界へ行くこととなる。そこには、彼と同じ「自分がやってみたいことを追求し、その完成の域に達すること」を目標とするカモメ達がいた。彼はそこでたくさんの出来事を通して、自分が元いた世界に戻り、自分と同じ考えを持ったカモメ達を教育していくことを決意したのだ。元いた世界に戻ったジョナサンは、かつての自分と同じ、群れから追放されたカモメ、フレッチャーに出会い、自分の弟子とした。その後、ジョナサンは弟子を増やし、群れの掟を破り群れに戻ることにしたのだ。でも一度追放されたカモメが歓迎されるわけがなく、群れの長老は彼らを見下ろすように指示を出した。しかし彼らはたくさんのカモメの前で飛行の練習をして見せた。すると、彼らの華麗な飛行術に魅せられた何匹かのカモメ達が弟子入りを申し込んできた。しかしその一方で、自分たちとは違う追放カモメ達を悪魔と呼び殺そうとする暴徒も現れたのだ。

この本を読んで、やはり周りとは違うことをするというのは勇気のいることだと思った。私も一時期、周りとは趣味や考え方が合わずに変な奴というレッテルを貼られ、辛い経験をしたことがある。その時に、この本に出合っていたならば、もう少し自分に誇りをもって堂々としていられたような気がする。私もこれからは、尊敬すべき変わり者、カモメのジョナサン・リヴィングストンのように、真の自由を追い求め、自分に素直に生きていきたいと思う。